

第42回神奈川術後代謝栄養研究会

主 題 「論文を書くために必要なこと」

日 時：令和元年 7月20日（土） 14時00分から16時00分

会 場：TKPガーデンシティPREMIUM 横浜西口

開会の辞：横浜市立大学 消化器・腫瘍外科学 主任教授 遠藤 格

一般演題：14：00～14：55

座長：横浜市立大学 消化器・腫瘍外科学 小坂 隆司

コメンテーター：横浜市立大学附属市民総合医療センター
消化器病センター 渡邊 純

1. 後期研修医の論文執筆について
横浜市立大学附属市民総合医療センター IBDセンター 鳥谷健一郎
2. 論文を書くために必要なこと
虎の門病院 消化器外科 矢後 彰一
3. 論文を書くために必要なこと
帝京ちば総合医療センター 村上 崇
4. 論文を書くために必要なこと
横浜市立大学 消化器・腫瘍外科学 山田 顕光
5. YCOGからの論文投稿費用の援助について
横浜市立大学 消化器・腫瘍外科学 小坂 隆司

特別講演：15：00～16：00

座長：横浜市立大学 消化器・腫瘍外科学 主任教授 遠藤 格

演者：東邦大学大学院 消化器外科学
教授 鳥田 英昭 先生
「バイオマーカーからみた食道癌・胃癌治療戦略」

閉会の辞：横浜市立大学附属市民総合医療センター
消化器病センター 教授 國崎 主税

主 催：NPO法人横浜臨床腫瘍研究会 YCOG

後期研修医の論文執筆について

鳥谷建一郎

横浜市立大学附属市民総合医療センター 炎症性腸疾患センター

当教室の後期研修医の学会発表総数は年々増加傾向で、2017年度は後期研修一人当たり3年間で平均6.9回の学会発表を行っており、外科専門医取得のための必要な業績を満たしているが、論文に関しては平均0.6本で、約半数が論文を1本も執筆せずに後期研修を修了している現状である。

後期研修医で論文執筆することは多くの医局の先生方に早くから名前を覚えてもらえる手段であり、また消化器外科や乳腺専門医などの資格を早期に取得することができる可能性がある。

①Case reportを学会で発表後にできるだけ早く書き始めること、②身近なActive writerと密に連絡をとる

ことの2点を自身は心掛けたことで後期研修3年間の間に6編のCase reportを投稿し、論文掲載することができた。

当教室で後期研修医が発表した論文化されていないCase reportが半分論文化された場合、後期研修医を修了する時点で平均1.8本の論文を執筆することとなり、消化器外科専門医、乳腺専門医の業績資格を後期研修終了と同時に満たすことが出来る可能性がある。

Take home message ①後期研修の間にまずCase reportを書いてみよう。②学会でCase reportを発表したら直ぐに執筆を始めよう。

論文を書くために必要なこと

矢後 彰一

虎の門病院 消化器外科

医師としての評価は、豊富な臨床能力や、手術手技の熟練度、医療スタッフや患者さんとの関係性の構築、後輩への指導力など偏りなく身につけることでなされるべきであり、若手外科医は臨床能力や手術手技を磨くことと並行して学術活動を行うことも求められる。論文を書くことは医師としての活動の一つの側面であると思われるが、現実的には専門医等の資格にも必要になることから、医師である以上論文執筆は避けて通ることはできない。

論文執筆においては、①モチベーションを保つこと ②環境を求め、整えること ③目的・期限を決め、勢いで書くこと ④気軽に前向きに取り組むこと、が重要なことと考え、Clinical Questionになりうるか、学会発表や論文のTopicになりそうな症例かどうか等を日常診療の中で考えておきたい。

多忙な若手外科医にとって論文執筆は困難な側面もあるが、少しずつ取り組むことで自身を成長させていく契機にしたい。

論文を書くために必要なこと

村上 崇

帝京大学ちば総合医療センター 外科 助教
横浜市立大学消化器・腫瘍外科学 客員研究員

【目的】

筆者の経験や調査に基づき、論文を書くために必要なことを論じる。

【論文とは何か】

多忙な外科医にとっては、多くの労力や時間を要する論文執筆は困難を伴い、消極的になりがちであると思われる。論文執筆に対して積極的な姿勢を持つためにも、まずは科学論文とは何かについて考えていきたい。論文は事実に基づき、主張を論理的に展開する文書である。科学論文は、未解決の問題に取り組んでおり、その問題の解決が多くの人に望まれており、かつその問題の解決に何らかの新しい貢献をしていること、を兼ね備えた文章とされる（「これから論文を書く若者のために」酒井 聡樹著 共立出版）。また様々なウェブページや文献では、自分の行った研究成果を世に問うことが論文の意義であると述べられている。得られた研究成果は後の研究者の参考となり、新しい研究成果に結びつくものであるため、質の高い一編の論文は以後の科学・社会の発展に貢献しうる。このように、論文を世に出すことで多くの患者や診療にあたる医師の一助となりうる。

【論文を書くために必要な事項】

論文を書くために必要な事項について考察する。筆者は、①知識、②技術、③習慣、④環境、⑤指導者、そして⑥モチベーションを挙げ、数字が大きいものほど基礎として重要ではないかと考えた。土台となる⑥モチベーションに関し、米国の作家であるDaniel Pink氏が提唱したモチベーションの分類 (https://www.ted.com/talks/dan_pink_the_puzzle_of_motivation) を参考とした。モチベーションは2つに分類され、1つはExtrinsic motivation (外的モチベーション) であり、金銭や名

誉など外からのインセンティブに誘導されるモチベーションである。これは学校で行われる試験問題のように解答が1つに決まっているような問題を効率的に解かせるのに有効である。しかしながら、複雑で創造性を要する問題解決には無効であるどころか、むしろマイナスに作用しうる。他方、Intrinsic motivation (内的モチベーション) は自主性に裏付けられ、自己の成長や、より大きな目的達成を目指すモチベーションである。Intrinsic motivationを簡潔化すると、大事だから、好きだから、あるいは面白いから実行するということであり、複雑な問題を創造的に解決するのに役立つ。論文執筆は先述のように科学や社会の発展に寄与するものであり、かつ創造性を要する活動であるため、筆者はIntrinsic motivationが大切だと考える。次に重要な事項として⑤指導者 (Mentor) を挙げた。幸いにも筆者は、これまでに多くの優れた先生方にご指導を頂いた。このような先生方に共通している点は、論文執筆を得意とし、ハードワークを行い、指導の際は厳しくも、しかし暖かく最後まで継続してくださることであると感している。このような指導者に出会ったら、与えて頂いたチャンスを生かすことが重要である。当然であるが、④環境は大切である。論文執筆には創造性が必要なので、ある程度の時間的、精神的余裕が必要不可欠である。あまりにも日常業務に追われてしまう環境では、クオリティの高い論文を執筆することは困難である。その反面、価値のある新しい研究や試みを進めていくような活動的な環境も必要であるため、この両立を目指した環境整備が重要と思われる。あまりにも多忙のため執筆できない状況では、温めておき、書ける状況になったら書くのが次善策である。次に③習慣化を挙げたが、すぐに取り掛かり、とにかく一歩でも進捗させることである。習慣化できれば執筆に伴う労苦は軽減される。最後に①知識や②技術を挙げたが、

これらに関しては「習うより慣れよ」という要素が多いと思われる。慣れない時期には調べながら書き、書きながら調べる、の繰り返して文書が少しずつ構成される。論文出版に至るまでには草案作成から指導者の校閲、英文校正、投稿、Revisionなど様々なステップがあるが、いずれの段階もやりながら慣れ、指導を通して技術が磨かれていくものと思われる。論文内容に関しては、様々な事項を投入して盛り沢山にするよりも、内容が一貫していてシンプルな方が欧米では受け入れられやすいと感じる。恩師であるカリフォルニア大

学サンディエゴ校外科学のRobert M. Hoffman教授は、常に「Less is more」と論じて下さった。

【結 語】

論文執筆は労力および時間を要するものの、科学・社会の発展に貢献しうる大切な作業である。指導者から書くように促された時がチャンスであり、まずは書いてみようか程度の気持ちから着手し、継続することを提案する。

論文を書くために必要なこと

山田 顕光

横浜市立大学大学院 医学研究科 消化器・腫瘍外科 助教

【緒言】

研究計画を立てて研究を遂行し、論文執筆に至るまでには多くの障壁があるが、モチベーションを保って障壁を乗り越えるためには何より主体的であることが大切である。

【研究テーマと学会発表】

まず研究テーマについて、日々の臨床で湧き上がる疑問点を書き留めることをお勧めする。そして自分のアイデアを蓄積し、PECO、FINERなどで形式化してClinical QuestionをResearch Questionに落とし込み研究計画を立てる。研究の進め方が分からなければ、医局で行われる予演会を含め他者の学会発表や論文から学べることはたくさんある。学術的な業務も自分のスキルアップのための手段と考えて積極的に利用したい。統計解析および、解析ソフトの使い方に関する多くの著作があるため何か一冊の通読をお勧めする。大学院での系統立った講義は個人的に有用であったと思う。更に年間の学会予定を把握し、どの学会でどの研究を発表するかの見通しを立てておくと、主体的に研究を進めることができる。自分の研究テーマの方向性を絞って一貫性のある研究ができれば、競争的資金獲得

にも有利になる。

【論文化】

学会発表した研究内容は効率よく論文化したい。論文の書き方の指南書も多く出版されているので詳細は割愛するが、論文を書くにあたって、図表の作成やM&Mなど隙間時間でできる単純作業パートと、Introduction、Discussionなどの論理展開を練るような熟考パートがあるため、ペース配分を考えて執筆作業に取り組むとよい。また論文執筆に慣れていなければ、指導者に対して、何が分からないか、どうしたらいいか積極的に問いかける姿勢でいれば、少しずつでも前進できるように思う。日頃から臨床や研究の議論ができる仲間存在やカンファレンスの機会も大切にしたい。苦勞して執筆した論文が世に出た喜びは、次の研究への大きなモチベーションにもつながる。

【結語】

研究の始まりから論文執筆まで、主体的に関わり、分からないことは人に聞いて少しずつでも前に進めていくことが肝要と考える。